

## 天平宝字二年の写経事業

——内相宣金剛般若経と知識大般若経——

宮崎健司

天平宝字二年（七五八）に造東大寺司写経所で行なわれた公式の写経事業は、(1)六月十六日内相宣千卷金剛般若経、(2)七月四日内相宣千卷千手千眼経・十部二百八十卷新編索経・百廿卷業師経、(3)八月十六日内相宣千二百卷金剛般若経の三つである。いづれもが時の権力者藤原仲麻呂の命によるものであった。また、これら正式の写経とは別に大般若経の書写がいく人かの官人の願いによりなされている。これらの写経はどのような関係であったのか、特に(1)・(3)の金剛般若経と大般若経の書写の関係について考えてみたい。

紫微内相藤原仲麻呂の宣によって命じられた千卷金剛般若経（以下「千巻経」）書写は、六月十六日に命じられるとすぐに書写にかかり、九月五日に経師たちの布施が請われている。千巻経は「御願」と呼ばれ、内裏の意志に基づくものと思われる。ついで八月十六日にやはり内相宣による千二百卷金剛般若経（以下「千二百巻経」）書写が命じられるが、ほぼ一ヵ月遅れで書写にかかり、十一月三日に経師たちの布施が請われている。千二百巻経も「勅旨経」と呼ばれ、千巻経とおなじく内裏宣をうけたものといえる。

千巻経は六月十六日に命じられたが、当時光明皇太后が不予定であったのでその病氣平癒を目的としたものといえよう。一方、千

二百巻経書写の命が下された八月十六日の『續日本紀』には「遣使大詔天下諸国、欲行大嘗故也」とみえ、千二百巻経が淳仁天皇の大嘗祭に関連していたと考えられる。金剛般若経について『續日本紀』神龜四年二月辛酉条によると除災効果を持つものとして使用されていることがわかり、この点から光明皇太后の病氣平癒や淳仁天皇の大嘗祭における金剛般若経の書写も大きな意味での除災・除厄を期待したものといえる。そして、書写された大部の金剛般若経の処置に深く関わったと思われるのが慈訓であることから、本写経は慈訓によって建議されたと考えられる。この点、慈訓の本宗である法相宗について、井上光貞氏は、奈良時代の法相の模範となった窺基が法相宗とは別に金剛般若経等の研究をしたとし、日本においても法相の本宗とともに般若経典の研究がなされ、それが護国經典として使用されたと指摘されている。したがって、慈訓が光明皇太后の病氣平癒や淳仁天皇の大嘗祭での金剛般若経書写の建議者として最もふさわしい人物といえる。おそらく光明皇太后の不予定以来、自らの政權継続に不安を感じていた藤原仲麻呂が、慈訓の建議を受けて内裏に働きかけて実施したものである。

天平宝字二年の三千六百巻にもぼる写経事業の合間をぬって、いく人かの官人や僧侶たちの要請を受けて大般若経が造東大寺司写経所で書写されているが、これは「司并人々大般若経」などと呼ばれ、勅命によって各官人に割り当てられた知識経であった。『續日本紀』天平宝字二年八月丁巳条によると、勅によって災厄を除くために摩訶般若波羅蜜の念誦が命じられているが、知識大般若経第一巻がこの勅の出された翌日十九日に書写が命じられていることから、この知識大般若経書写の勅命がこの記事に関連し

たものといえ、知識大般若経も除災を目的としたものであったと思われる。ここで注意されるのは、知識大般若経がやはり除災を目的として造東大寺司写経所で行なわれた金剛般若経と異なり、同じく勅命によっていたのに書写形態を異にしていることである。そこで両者には、書写が命じられる間に若干の異なる事情があったのではないだろうか。なぜならば、除災を目的とするのであれば、知識経が二度にわたり二千二百巻にものぼって書写されるように、あれまで固執していた金剛般若経の書写ではなく、同じ般若経典である大般若経が選択され、しかも知識経の形態をとったことである。

大般若経は『續日本紀』の中で何度もみうけられる経典であるが、やはり注目されるのは『續日本紀』天平九年四月壬子条の、道慈が大安寺で挙行していた大般若経転読を恒例の国家的行事にすることを請願して勅許されたという記事であり、道慈のこの建言は大般若経の普及する契機となっている。道慈は大安寺僧として有名であるが、「涉覽経典」・「尤精三論」と評されている。そこで天平宝字二年段階の僧綱で大安寺の所属あるいは三論宗を本宗とする人物がいたとすれば、この知識大般若経の建議者としてもっとも適当な人物といえるだろう。そこで注目されるのが天平勝宝八歳五月に律師に補任された慶俊である。慶俊は大安寺に入寺以降、道慈に師事して学問研究に励んだと考えられ、彼が律師として僧綱のメンバーであったことから、知識大般若経の建議者であったといえる。

慈訓建議の金剛般若経書写と慶俊建議の知識大般若経書写の関

係には、慈訓と慶俊の関係が注意される。慶俊は法相宗の五性格別説に異議を唱えて一乗説を主張し、これに対して興福寺仁秀は三論宗一乗説を批判しているが、少なくとも慶俊が慈訓を筆頭とする興福寺法相宗に教義的に対立していたといえる。

ところで慶俊の師である道慈はつとに大安寺僧として著名であるが、少なくとも神龜五年に興福寺にいたことがわかり、道慈が大安寺から興福寺へ移住した背景について、天平七年に唐より帰国した玄昉の台頭によって興福寺を追われ大安寺へ移籍したという森下和貴子氏の指摘がある。道慈の大安寺移籍の事情は、道慈に師事して教えを請っていた慶俊も知るところであったと思われるが、法相宗批判をした慶俊の思いには、教義上の対立にもまして師道慈を追放した興福寺に対する反発が存在していたと想定され、慶俊の知識大般若経建議も慈訓による金剛般若経建議に対抗したものであったと考えられる。

以上、金剛般若経と知識大般若経の書写の背景には、慶俊と慈訓の対立があったことを指摘してきたが、両者が僧綱のメンバーであったことからそれは単に個人的な対立にはとどまらなかったはずであり、藤原仲麻呂の専制化の中で興福寺の慈訓が重く任用され、僧綱内においても少僧都ではあるものの実質的な指導者として行動したと思われる節があることから、慈訓の行動に対する他の僧綱メンバーの反応を代表するものと考えられるのではないだろうか。したがって、このような諸点は慈訓によって推進されたとする藤原仲麻呂政権の仏教政策の性格と、それに対する仏教界の反応を知る重要な手がかりを提供していると考えるのである。